

身体の技法に関する研究：その獲得と行為に着目して

Study on the body techniques : Focusing on its acquisition and action

佐 藤 雄 哉

Yuya SATO

ABSTRACT

In this study, we consider human movement as a technique that the body controls and determine its value. The discussion about such body techniques is also an attempt to re-evaluate the formation of self and the building of relationships with others that accompanies “the technique of the body to exercise” in a modern society.

Humans can recognize the existence of others through the perception of physical movement, namely, the behavior of the body. In other words, the bodily techniques, which acquires the social role of the person who exercises it, and paradoxically, the acquisition of the bodily techniques is a necessary condition for being recognized as a member of the culture. But that does not limit our lives. The acquisition of a cultural body based on the bodily techniques represents the life of human beings that is not restricted by “external rules” or “internal moral”. In other words, it gives us the “aesthetic manner” in our lives. Today, we must rethink about the “acquisition and exercise of aesthetic manners” of each of us.

Key words; Body technique, Kata, Manner

1. 問題の所在

人間はその時々感情や思考に応じて多様な身体運動を駆使し、自己を取り巻く世界へと働きかける存在である。しかしそれらは、精神の働きによって創出された運動様態ではない。言い換えれば、人間が用いる多様な運動は、精神の働きと乖離した別の領域で構築されたものなのである。

モースは「伝統的な様態で身体を用いる仕方」を身体技法と呼び、それは社会にとって有効な伝承的行為であるとする¹⁾。そしてその概念は、我々が日ごろ何気なく行っている身体運動の一つひとつに、明確な意味をもたらすことを教えている。例えば、座り方、歩き方といった単純な身体運動であっても、そこに所属する文化の特性が投影されていることは容易に理解されよう。モース

によれば、「いわゆる技法なるものには、すべてその型がある」²⁾のだが、その型とは文化に根差した「型」である。そのような特定の文化によって習得した自然な振る舞いは、その個人が今までどのような人生を歩んできたかを裏付ける証となるものでもある。そしてこのような文化的な特性を反映した人間の身体運動を考察する試みは、単にどのような動作をするか、その動作はどのような方法で習得されるかと言った表層的な次元を超えて、他者認識や人間関係の問題へと移行する。このような身体の振る舞いとその価値の探求は、他者との関りの中で生きる人間にとって、一つの社会的な課題として捉えることもできよう。

2. 研究の目的

本研究では、人間の運動を身体が扱う技法として捉え、その価値を考察する。そしてそのような身体の技法に関わる議論は、「運動する身体の技法」に伴う自己の形成と他者関係の構築を、現代社会において再評価する試みでもある。

3. 獲得する身体

人間は他者の存在を、身体運動の知覚を通して認識することが可能である。つまり身体の振る舞いは、その存在を特徴づけるものとなるのである。ヴァーガスは、ことば以外の数多くの方法で対人コミュニケーションが展開されることに言及し「九つの非言語メディア」³⁾を挙げているが、その中の一つである「動作」⁴⁾について、「すべて通常なかば無意識に行われていること」⁵⁾と述べている。彼女はアメリカ中西部で培った自身の外交的な性格がボリビアの風土に適さなかった事例を挙げ、子どものころから身につけ、無意識に出てくる習性を変えることの困難さに言及しているが⁶⁾、それはモースが第一次大戦の経験から「英軍はフランス製のシャベルを使うことが出来なかった」⁷⁾と述べることと一致するものでもあろう。

モースはこのような経験から、「わたくしは自分の技法から脱することができない」⁸⁾と述べており、その言葉からは我々人間が技法の上に生きていることが理解できる。

さて、人間の技法は大別すると、二つの方法によって習得されるものである。一つ目の習得方法は生まれながらの動作、言い換えれば先天的に身につけている、もしくは先天的な要因により身につけられる動作である。モリスは、著書『裸のサル』⁹⁾で人間を、“一つの種としての動物”として捉え、その行動を論じた。「人間は、抽象的思考と製作行為においては進歩したかもしれないが、衝動や動作においては全く変わっていない」¹⁰⁾とする彼の主張からは、人間という種そのものに付与された先天的な性質の継承が示唆されている。また長谷川も、「ヒトに現れる行動が多様であることは、そこに規則性が何もないことを示してはいない」とする¹¹⁾。この二つの意見は、人間の行動選択には共通の生物学的基盤があることを示すものとなるだろう。

二つ目の方法は、成長に従って身につけていく、いわば後天的習得による動作である。ベネディクトは「話ができるようになったとき、人は彼の所属する文化の一つの産物に過ぎなくなる。成長して、その文化のなかでの活動の一部分を果たすようになったとき、慣習のくせがかれのくせとなり、慣習の信条がかれの信条となり、慣習にとって不可能なことは彼にとっても不可能なことになる」と述べる¹²⁾。人間は多くの場合、成長に従って自文化を踏襲した振る舞いを身につけるのだが、それはつまり、我々の生きる社会そのものが、自己の在り方に深く影響を与えていることの証明とも言えよう。

このような、「ヒトは誕生した時点で既に多くのプログラムが組み込まれている」という視点と、「ヒトは文化によって再構成されている」という視点によって、人間には「人間そのものに組み込まれたプログラムに基づく動作（人間存在に基づく要因）」と、「文化的な要素を取り込みつつ形成

する動作（文化や環境に基づく要因）」があることが明示されるのである。

モリスは人間の動作を、遺伝的継承による「生得動作」¹³⁾、人間の身体的特徴から効率の良い動作を自身で発見する「発見動作」¹⁴⁾、社会的同化による「同化動作」¹⁵⁾、計画的訓練により身体技法を習得する「訓練動作」¹⁶⁾と、それらが複雑に絡み合った「混合動作」¹⁷⁾の五つに分類する。「生得動作」と「発見動作」は人間存在に基づく要因により習得された身体運動であるのに対し、「同化動作」と「訓練動作」は育った環境や文化の影響によって習得される動作である。しかし、成人に見られるほとんどの動作は外的要因の影響を受けた「混合動作」に分類される。例えば生得的な動作である「泣くこと」も、成長に従って周囲の状況や文化に即した泣き方が選択されるように、成長に応じてあらゆる動きは文化的に矯正されていくこととなる。つまり文化的な要素により構成される動作、言い換えれば身体技法の概念は、成熟した人間の身体運動を網羅しているのである。よって、ほぼ全ての動作が最終的に文化や環境によって身体技法へと変化していくことは、人間の行動に文化的な「意味」が付与されていくことの証明なのである。

さて、モリスは「種としての人間は、技術的・知的にすぐれているが、身体活動という動物の特性までも失ったわけではない。（中略）ヒトは言語に重点を置きすぎるので、動作、姿勢、表情が自分を語っていることを忘れがちなのである」¹⁸⁾と述べる。例えば他者とコミュニケーションを取る際、人間は往々にして“うそ”をつく。しかしモリスによれば、人間が“うそをつく”のは何よりもまずことばであって、その他の伝達信号でうそをつくことはすくない¹⁹⁾。そしてその「多くのうそは見破られ、そして見て見ぬふりをされるのである」²⁰⁾。

ここで我々は、自身の身体活動の一つひとつを改めて注視する必要がある。言い換えれば人間の生は、どのように身体技法を用いるかによって大

きく左右されるのである。矢野によればこの社会は、身体技法の体系によって繊細に、細部に至るまで作りだされている²¹⁾。また彼は、身体技法の一種であり、人間の関係を美的で秩序あるものとするマナーや礼儀作法の習得が、かつての身分社会における人間形成の過程において、多大な重みをもっていたことも示している²²⁾。このような主張は、人間は身体技法を用いて特定の社会的存在の姿を演じなければならないという事実を示唆するものともなろう。換言すれば、身体の振る舞いを通して他者を認識する我々は、身体技法によって社会的存在としての役割を得ているのであり、その身に社会を宿らせることによってこそ、その成員として認められるのである。

しかしそれは同時に、矢野の言葉を借りれば、身体としての私たちの生の幅が既成秩序の枠へと細部に至るまで制限されることも捉えられる²³⁾。ここにおいて、単なる「身体の運動」から発展する「身体技法」の習得とそれに伴う自己の形成、また他者関係の構築について詳しく論じる必要が示されるのである。

4. 行為する身体

身体技法の習得は、社会生活を営む限りにおいて重要な意味を持っている。モリスは、「自分の属する文化の中では、各個体は急速にエキスパートにならざるを得ない。こうした服装や習慣の小さなちがいは、それ自身としては全く意味がないのだが、地位を判断し、順位制の中に位置づけるゲームとの関連性においては、この上なく重要なものとなっている」²⁴⁾と述べるが、それは人間が、社会的・文化的な洗練を経て獲得する身体の有用性を明示する言葉と言えよう。

では、文化的な身体とは如何なるものであろうか。例えばマナーや作法といった、文化的な振る舞いを習得した身体もその一つとして挙げる事が出来よう。では一体、マナーや作法とは何であろうか。見田によればマナーとは、「ヒトが自己あ

るいは他者のもつ動物性の次元になるべく直面しないですむように作り上げた一種の身体技法」²⁵⁾である。祖父江は「人間と動物のあいだの本質的な差異を示すために、人類学者の考えだした概念が『文化』である」²⁶⁾と述べるが、その主張を鑑みるとマナーは人間が人間たる上で重要な役割を担っていると考えることが出来る。

一方で加野は、『マナー』や『礼儀作法』はそれ自体が合理的な根拠を持っているわけではなく、社会の伝統や慣習の中に位置づいている」²⁷⁾ものであり、そのような性質を持つ故に「犯罪や道徳に比べて些細なことがらと考えている人が多い」²⁸⁾と主張する。確かにマナーや作法という概念には強制力がないため、過度にその遵守を促されると煩わしく感じる人間もいるだろう。違反すると罰せられる「ルール」や、「モラル」に反した行いが良心を痛めることを考えると、マナーや作法が軽んじられることも頷ける。しかしマナーや作法の習得は、文化的身体を獲得と極めて深くかわる行為である。

毛利によれば、他者関係の構築に重要なルール・モラル・マナーの三つの概念はそれぞれの領分が微妙に重なっているが故に、マナーに反する行動の対処としては、①「マナーのルール化（マナーに反する行動をルール違反にすることで、叱ったり罰したりする）」と②「マナーのモラル化（マナーに反する行為に対して、罪障感や良心の痛みを持たせる）」といった両極の取り組みが取られているとする²⁹⁾。彼はこの二方向の取り組みが、環境によっては必要な対処ではあるものの、それによってルール、モラルに対するマナーの領分をますます狭くしてしまう恐れがあると警鐘を鳴らしている³⁰⁾。そこで彼は「江戸しぐさ」という概念を用いて、マナーや作法の遵守を次のように推奨する³¹⁾。

江戸っ子たちが、他者への気遣いに基づいて、気持ちよく関わって生活するために創りだした所作、マナー。それが「江戸しぐさ」です。（中

略）大きな声であいさつするのが自然なとき、小さな声であいさつした方が自然なとき、「会釈のまなざし」が一番自然なとき。仲間との間で、先生との間で、来校された方との間で、相手によって、状況に応じて自然な挨拶を使い分けることができれば、クール（カッコいい）です。江戸っ子は、私たちが今、「クール」とか「カッコいい」とか言っている「生き方の美学」を、「粋（いき）」と呼んでいました。

毛利はルールとモラルに挟まれて、一見狭くなっているように見えた「中間の領域」は、広大な裾野をもつ「美意識」の領域であると述べる³²⁾。ここにおいて、ルール・モラルと比較して軽んじられていたマナー領域の意義が明らかとなろう。

矢野は、マナーが道徳と法の間位置づく「準ルール」でありつつも、他方では共同体のルールを超える「超ルール」であるとの見方も展開する³³⁾。毛利は、ルールを破ることで反骨精神を示しながら、あえてマナーを守ることで「生き方の美学」を貫く人間の例を挙げ、『外的規制（叱りや罰といったサンクション）』でも、『内的規制（罪障感、良心の痛み）』でもない、もう一つの美的な規則原理としての『粋（いき）』が受け入れられることを主張した³⁴⁾。そもそも「粋（いき）」とは、九鬼によれば「大和民族の特殊の存在様態の顕著な自己表明の一つ」³⁵⁾である。つまり「粋（いき）」な振る舞いを一つの例として、民族的特徴が反映された文化的な身体とは、特殊な存在容態の中で生まれた価値観（美意識）や思想が、身体を媒介に下界へと表出する状態を示しているのである。

文化に支えられた多くの身体運動は、生きる上で必ずしも必要となる技法ではない。しかしそれは人間にとって、自己を形成する上で極めて重要な行為であると言える。人間は成長するに連れて生得的な運動様態から脱し、文化によって自己を再構築していくこととなる。そしてそれは、人間の存在そのものが多様な意味を獲得していく過程

と捉えることも出来るのである。

6. 結 語

本研究は、人間の運動を身体が扱う技法として捉え、その価値を考察したものであった。そしてそのような身体技法に関わる議論は、「運動する身体技法」に伴う自己の形成と他者関係の構築を、現代社会において再評価する試みでもある。

人間は他者の存在を、身体運動の知覚を通して認識することが可能である。つまり身体の振る舞い、言い換えれば身体技法は、それを行使する者の社会的役割を獲得するものであり、逆説的に考えれば身体技法の習得は、その文化の成員として認められるために必要な条件とも言える。しかしそれは、身体としての私たちの生の幅が制限されることを示すものではない。身体技法に基づく文化的な身体獲得は、「外的規則」や「内的規制」に制限されることのない人間の在り方を提示してくれる。つまり我々の生における「美的な規則原理」を与えてくれるのである。多様性の尊重と社会の調和が叫ばれる今日において、我々一人ひとりの「美的な規則原理の習得と行使」は改めて問い直すべき議論であろう。

引用・参考文献

- 1) マルセル・モース：訳 有地亨 山口俊夫 (1976), 社会学と人類学Ⅱ, 東京, 弘文堂, p.121.
- 2) ibit, p.124.
- 3) ヴァーガスが挙げる非言語メディアは次の九つである。
 1. 人体 (コミュニケーション当事者の遺伝因子に関わるもろもろの身体的特徴の中で、なんらかのメッセージを表わすもの。たとえば性別、年齢、体格、皮膚の色など)、
 2. 動作 (人体の姿勢や動きで表現されるもの)、
 3. 目 (「視線の交差」と目つき)、
 4. 周辺言語 (話しことばに付随する音声上の性状と特徴)、
 5. 沈黙、
 6. 身体接触 (相手の身体に接触すること、またはその代替行為による表現)、
 7. 対人的空間 (コミュニケーションのために人間が利用する空間)、
 8. 時間 (文化形態と生理学の二つの次元での時間)、
 9. 色彩
- ジョリー・ヴァーガス：訳 石丸正 (1987), 非言語コミュニケーション, 東京, 新潮社, p.16.
- 4) ヴァーガスはこの「動作」という項目を、同様に非言語メディアに上げられる「目」や「身体接触」という他の身体動作とは区別し、一つの身体の振る舞いそのものに着目した内容として挙げている。
- 5) マジョリー・ヴァーガス (1987), p.72.
- 6) ibit, p.77.
- 7) マルセル・モース (1976), p.124.
- 8) ibit, p.124.
- 9) デズモンド・モリス：訳 日高敏隆 (1979), 裸のサル—動物学的人間像—, 東京, 角川書店.
- 10) デズモンド・モリス：訳 藤田統 (2007), マンウォッチング, 東京, 小学館, p.29.
- 11) 長谷川真理子 (2001), 進化心理学の展望, 科学哲学34 (2), pp.11-23, p.14.
- 12) ルーズ・ベネディクト：訳 米山俊直 (1973), 文化の型, 東京, 社会思想社, p.25.
- 13) デズモンド・モリス (2007), pp.18-30.
- 14) ibit, pp.30-32.
- 15) ibit, pp.32-37.
- 16) ibit, pp.37-38.
- 17) ibit, pp.38-42.
- 18) ibit, p.12.
- 19) デズモンド・モリス (1979), pp.204-205.
- 20) デズモンド・モリス (2007), p.215.
- 21) 矢野智司 (2014), マナーと礼儀作法の人間学の再定義に向けて—儀礼論から贈与論へ—, 矢野智司編, マナーと作法の人間学, 東京, 東信堂, p.21.
- 22) ibit, pp.20-21.
- 23) ibit, p.20.
- 24) デズモンド・モリス (1979), pp.221-222.
- 25) 見田宗介 栗原彬 田中義久 編 (1988), 社会学辞典, 東京, 弘文堂, p.832.
- 26) 祖父江孝男 (1979), 文化人類学入門, 東京, 中央公論社, p.35.
- 27) 加野芳正 (2014), 〈マナーと作法の社会学〉に向けて, 加野芳正 編, マナーと作法の社会学, 東京, 東信堂, p.4.
- 28) 加野芳正 (2014), まえがき, 加野芳正 編, マナーと作法の社会学, 東京, 東信堂, p. ii.
- 29) 毛利猛 (2014), 中学校におけるマナー問題と「粹(いき)」, 矢野智司 編, マナーと作法の人間学, 東京, 東信堂, pp.171-172.
- 30) ibit, pp.171-172.
- 31) ibit, pp.173-175.
- 32) ibit, p.176.
- 33) 矢野智司 (2014), pp.4-5.
- 34) 毛利猛 (2014), p.177.
- 35) 九鬼周造 (1979), いきの構造, 東京, 岩波書店, p.18.